

# JSCP ニュースレター

# 9

No.09 2017年3月発行 編集・発行・日本コミュニティ心理学会広報委員会

## 第19回大会を終えて

大会長 牧 裕夫 (作新学院大学)

昨年、梅雨最中の大会開催でしたが、気がつけば夏が過ぎ、今や大河ドラマも大阪冬の陣を迎え……、と当初のニュースレター原稿を提出していたのですが、さらに季節がめぐり、日々トランプ大統領の話題絶えぬ今日、月日の流れは速いものです。

研究発表は口頭発表が11件、ポスター発表が23件、そして自主シンポジウム1件、ラウンドテーブル1件、ワークショップ2件と例年とほぼ同じ発表申し込みがあり、参加者も例年どおり150名位となりました。北海道から九州まで、関東とはいえども、東京一宇都宮新幹線での移動時間に近い、キャンパスへのバスの移動の中、多くの方々に参集いただき感謝いたします。大会企画の講演者としてご多忙の中、名古屋大学大学院、窪田由紀先生をお迎えでき、大会シンポジウムでは、林 洋克先生、大貫若菜先生、コメンテーターとして小澤美代子先生、狐塚貴博先生をお迎えできたことに感謝します。また、十分な打ち合わせもない中、自発性と創造性により尽力いただいた学生スタッフ各位に感謝いたします。

本大会のテーマは「次世代を育むコミュニティ」でした。本大会の副大会長の小栗貴弘と打ち合わせをしていた中では、未だに多くの方々がそれ以前の日常を取り戻せ得ない東日本大震災を踏まえ、「次世代」としてその担い手である子どもの視座に着目しました。大会抄録の冒頭で私が中島みゆきの「糸」を引用しましたが、その未曾有の自然災害の中で、被災者、支援者それぞれの「糸」から編まれたコミュニティ全体としてのメトリックスの中で子ども達に何が起きて、何を残しているのかを大会として共有してゆこうというものでした。

窪田先生からは学校コミュニティでの心理教育としての予防プログラムの可能性を伺うことができました。狐塚貴博先生は栃木県でも同様な取り組みを行おうと円環的スパイラルに入ったようで、私も巻き込まれそうです。きっと狐塚先生自身が呈示された「PTG (Post Traumatic Growth)」という災害の中でのホメオスタシ的な成長の理論を含め進展していくのでしょうか。林洋克先生から、被災した子ども達が大人と一緒に、自発的に復興への担い手になっている姿がうかがえました。災害時、学校が街を支え、その本来の機能を取り戻す過程に復旧への心的な核があるように思えました。小澤美代子先生にありましては、「とにかくその現場へ」と話され、(見るからにたくましい林先生も同じですが、) その姿に子ども達は何を受け取っているのだろうと思いがふくらみました。大貫若菜先生からは、個や集団間を繋げるケースワーク的な機能が、自然災害という中で心理職とどう連動しているのだろう、時に復旧の一つの核としての地域の学校という枠に対してどう関わっていくのだろうかと思いが沸いてきたりします。

私は本大会では運営にあたってこともあり、各種発表会場で諸先生方のご発表をあまり伺うことができませんでした。個人的には前述のとおり、大会をとおしての「次世代」に対する芽生えを感じることはできましたが、きっと参加された皆様にもありまして、それぞれのフィールドに戻られた中で、新たなチャレンジに繋がっているものと期待しています。

さすがコミュニティ心理学会と思わせたのが懇親会でした。会場「OTOWA KITCHEN」の魅力もありましたが、その熱気には本学会、我が国の臨床的地域援助分野の将来の進展を見るように思えました。その中で少し反省させられたのは、どうも皆様は懇親会の後の宇都宮餃子のスペースにお腹を空けようとしていたようで、ワインやビールの膨大な消費量に比べ、素敵なお料理が若干残ってしまったかに思えます。小生といたしましては、この懇親会での体験を今後の他学会開催時の参考にさせていただきます。

最後に手前味噌そのものではございますが、不肖(不詳)私が会長ではありまして、準備委員の皆様大変お世話になりました。とりわけ終始指導、アドバイス頂いた大妻女子大の平野貴大先生、そして実質的に大会長ともいえる小栗貴弘先生には大変感謝いたします。

本学会の「次世代を育む」彼らの若い力により、来年度の上智大大会と本学会そのものの、成功とさらなる発展を祈念いたします。

## 第19回大会に参加して ～ 大学院生より ～

宇都宮の作新学院大学で行われた日本コミュニティ心理学会で、私は初めてポスター発表をさせていただける機会に恵まれました。慣れない発表に緊張し戸惑っていましたが、聞きに来て下さる先生方が、皆様とても温かく、非常にサポートイブであり、沢山のアドバイスをいただくことが出来ました。医療、産業、教育の分野でご活躍されている先生方のご意見は、様々な角度からの幅広い知識に基づいたものであり、コミュニティ感覚にあふれたご意見は、「これぞ、コミュニティ心理学だ」と感じさせていただくものばかりで感動致しました。いつしか緊張もほぐれ、共同体感覚を実感しておりました。

自主ワークショップや、基調講演、口頭発表、そして懇親会など、どれに参加しても温かく迎えられている感覚を覚え、コミュニティ心理学会の良さが体感できるものばかりでした。大会運営の方々の細やかな心配りや熱い気持ちに、心から癒される大会でした。このような経験をさせて下さった先生方に心から感謝いたします。(立教大学大学院 内山雅子)



博士後期課程に入学して以来、本学会大会に参加するのも3回目になり、毎年コミュニティに関する新たな視点を得る機会となっています。第19回大会は「次世代を育むコミュニティ」というテーマで開催され、子どもや学校コミュニティに内在する「強み」に焦点を当てた研究が印象に残っています。日本においてポジティブ心理学が市民権を得てきた背景もあろうかと思いますが、学会大会への参加を通じて、予防促進的アプローチの必要性や有効性について考えさせられる機会となりました。

私自身は、自主シンポジウムの話題提供および口頭発表の機会を頂きました。自主シンポジウムでは、コミュニティ心理学の中核となる価値観である「社会正義」に改めて焦点を当て、介入プログラムのあり方や目指すべき方向性について、幅広く議論することができました。発表当日に、共同研究者やフロアの先生方と有意義な議論ができたことはもちろんですが、発表に向けて準備する過程でも多くの学びがありました。本学会大会を通じて学んだことを、今後の研究に活かしていきたいと思っています。

最後になりますが、本学会大会の運営にご尽力いただいた皆様に、心より御礼申し上げます。

(国際基督教大学大学院 八田直紀)

## コミュニティ心理学を实践できる職場の紹介

梁 惠先生は、法政大学大学院の丹羽先生のゼミを修了後、スクールカウンセラーとしてご活躍です。

生徒本人のみならず、教師や保護者、学校などの環境に働きかけて行かなければならないスクールカウンセラーの仕事は、まさにコミュニティアプローチそのものと言えるでしょう。



### スクールカウンセラーとして私学でのコミュニティ心理学 梁 惠（東京学園高等学校）

私は現在、公・私立の中高等学校でスクールカウンセラー（以下：SC）として勤務しております。SC制度がはじまってから20年以上経ち、公立学校の中に浸透しています。一方、個人的な見解では、私立学校の中ではまだ少ないと感じています。

6年前から東京学園高等学校という私立の学校に赴任し、SCとして相談室の設置と教育相談などの業務を始めました。そこで、未熟な私は立教大学の箕口雅博先生、法政大学の丹羽郁夫先生・萩原豪人先生のアドバイスを得て、SCの働く姿勢として伝統的な臨床心理学のみではなく、コミュニティ心理学の考え方を学校教育相談体制作りの中に取り入れました。みなさんもお存じのことと思いますが、SCは一人職で学校という日常生活の場の中で活動

しており、個人的な心理援助のみではなく、コミュニティ心理学の中で非常に重要な概念であるコンサルテーション活動が大きなウェイトを占めております。そして、私が赴任した私学では、初めての相談室を設置することとなり、学校組織の中で社会的支援ネットワークづくりも伴ってきます。既存の校内の支援ネットワーク（生徒指導部）との連携を図りながら、新たな支援体制（教育相談体制）の構築に努めてきました。また、公立学校と違い、私学はある意味では企業と似ているところがあり、教職員へのアプローチなど産業領域も少し絡んでいますので、コミュニティ心理学を实践するには非常に相応しい場です。

### 若手学会員研究・実践奨励受賞者のその後&受賞のポイント 平成21年度(第7回) 受賞 大橋 智

コミュニティ心理学に関わっていない研究者や実践家とお話するときに、コミュニティ心理学の研究は「まるで農業のようだ」と言うことがあります。コミュニティにおいて研究実践を行う時、当事者のニーズの「土地」を耕しながら、地域の「土壌」にあった支援を、タイミングよく支援の「種まき」をし、こまめに「世話」をしながら、共にその「果実」を味わう。「耕し」が足りなくても、「土壌」に合わなくても、「種」がうまく芽吹かなくても、「世話」が足りなくても、成果である「果実」はなかなか実らない。そして、たまたまそのタイミングの「気候」が不順であったり、予期しない「虫」が付いてしまうことも、それが開墾し始めたばかりのフィールドであれば、しばしば起きることだと思います。

この賞は、若手研究者・実践家のこういった地道な「農業」をエンパワメントしてくれる試みだと感じています。私の研究実践の一部は、コミュニティ心理学研究（大橋・野口・大石,2013）や学会発表（大橋,2008;大橋・脇,2010など）の際にお示ししてきたのですが、研究フィールドとの付き合いはまだ続いています。そして、当事者のニーズの変化とともに、当初の研究計画からは少しずつ変化を続けています。

若手研究奨励賞に応募するにあたり、研究計画を検討する際に次のようなことを念頭に置きました。

第一に、「コミュニティ心理学」として研究計画を考えること。研究者によっても定義は少しずつ異なってくると思うのですが、（このようなある種の「多様性」が許されるところが、コミュニティ心理学会の懐の広さだと感じます）私にとっての「コミュニティ心理学」とは何かを深く考えさせられました。

第二に、研究として、そして実践としての実現可能性を考えること。単に「研究」者として、高台からコミュニティに関わるのではなく、コミュニティに巻き込まれながら参与的理論構成者として「研究」と「実践」を形作することは、純粋な「研究計画」にはなりづらいのではないのでしょうか。研究計画を検討するにあたり、コミュニティと研究者が共に変化しうる余地を残しながら、それでもなおデータから立ち上げていくような、「研究」と「実践」のバランス感覚を問われたような気がしています。

若手研究奨励賞の受賞によって、ようやく「コミュニティ心理学者」の端くれとして認めてもらえたような心持ちになったことを思い出します。コミュニティ心理学会にとって、この賞は「種まき」であり「開墾」でもある以上、芽吹き、実をなし、そして次の種を生み出せるような責任を感じます

広報委員長の小坂先生から、名誉会員となつての抱負・雑感を「ニューズレター」に書くようにとのメールを頂いた。

とは言え、時の会長、久田満先生名で名誉会員の称号授与の賞状と副賞として置き時計を頂いたのは2012（平成24）年7月のことで、4年も前のことであり、今更抱負をと言われても……、ということで、近況雑感で許して頂くことにしたい。

今年も7月に山本和郎先生がお亡くなりになり、昨年は星野命先生、さらに一昨年は安藤延男先生と、学会設立に先立つシンポジウム時代から日本のコミュニティ心理学を牽引し、支え続けてこられた偉大な先達の先生方が相次いで鬼籍に入られた。当初から行を共にさせて頂いた者として、いや増す淋しさを覚えるこの頃である。

さて、それはともあれ、2013年3月の定年退職後の小生は、特任講師として週1日2コマの講義をこなしてきているが、これも1年強の期間を残すばかりとなった。講義以外の日は自由気ままな生活を過ごしているが、日課として、1日1ページの翻訳をボケ防止の頭の体操代わりにやってきている。もちろん刊行の当ではなく、世界に1冊しか無い自家製本の自己満足に過ぎないものであるが、これまで2冊が形をなした。1冊は、先頃『コミュニティ心理学研究』の書評欄に投稿させて頂いた、Jason L. A. "Principles of Social Change"（「社会変革の原理」）である。もう1冊は、Martin, Jr. W. E. & Swartz-Kulstad, J. L. (Eds) "Person - Environment Psychology and Mental Health: Assessment and Intervention"

（「人・環境心理学とメンタルヘルス」）で、2014年新刊とのことだったのですぐに入手したのだが、実は2000年に刊行の本の、出版社を替えたペーパーバック版であった。したがって、文献も2000年以前のもの止まりで新しい追加も無く、少しがっかりさせられたが、これを機にと思い直して形にしたことであった。

ところで、つい最近下訳（の下訳）をやり終えた本がある。今年2月に出版された大著、Jason, L. A. & Glenwick, D. S. (Eds) "Handbook of Methodological Approaches to Community-Based Research"（「コミュニティベースの研究のための方法論的アプローチ・ハンドブック」）である。全383ページ、35章から成る、コミュニティ心理学の、しかもこれまでに類を見ない、質的、量的、混合的アプローチに基づく31種類もの研究法を紹介しているハンドブックである。見たことも聞いたこともない方法が満載で、無知の小生にはまさにちんぷんかんぷんの章や用語だらけの本であるが、とりあえず最後までやっつけてみた、というのが現状である。これから、改めて 章ごと丁寧に読み返して、理解可能な文章になった時点で、また書評にでも投稿してみようか、と密かに考えたりしている。コミュニティ心理学の世界は、果てしなく広いし、深いことを改めて痛感した1年であった。

一名誉会員の日常はこんなものである、という報告に替えさせて頂くことにしたい。

2016年11月25日 記

## 編集後記



前回の発行は昨年1月末でしたが、約1年ぶりとなってしまいました。当初は昨年秋口での発行を予定しておりましたが、大幅に遅れてしまい、早くより原稿をお寄せ頂きました皆様に深くお詫び申し上げます。

2012年2月発行の第3号で「私の健康法」というコーナーに執筆の機会を頂きました際にかつて尿管結石を患った話を書いておりましたが、先月半ばに再発し、今回は服薬では石が排出できずレーザーで石を破壊するため人生初の入院となりました。当初は5日程度で退院するつもりが正月をまたぎまる2週間の入院となり、あらゆる管で繋がる痛みと不自由さと共に健康の有難さを実感したのでした。

昨年7月には名誉会員であられ、また自分の大学・大学院での指導教授でもあります山本和郎先生が逝去されましたが、そのほんの数ヶ月前に大学ゼミの同窓会にて元気なお姿を拝見したばかりで大変驚きましたし、未だに実感が湧かないというのが正直なところです。在学中、先生はあまり特定の理論などを我々に押し付けることなく、自由にやらせて頂いたのが今思えば本当に有り難いことでした。気がつ

けば、「型破りになれ、形無しになるな」など、当時先生に言われた言葉をそのまま自分の教え子にも伝えていきます。

現在、公認心理士カリキュラムが検討されているところですが、今年2月22日に実施されました検討会においても、カリキュラム試案において大学院における必要な科目として「家族関係・地域社会における心理療法等に関する理論と実践」との項目が取り上げられており、どのような形になるのかはまだ見えない部分もありますが、コミュニティ心理学の重要性は今後益々高まってゆくものと思われます。（北翔大学 小坂守孝）

日本コミュニティ心理学会ニューズレター 第9号  
2017年（平成29年）3月31日発行

- ・発行 日本コミュニティ心理学会
- ・編集 日本コミュニティ心理学会広報委員会  
(小坂守孝・杉浦久美子・平野貴大・丹羽郁夫)

・本学会ホームページURL  
<http://jscp1998.jp/>

・広報委員会メールアドレス [publicity@jscp1998.jp](mailto:publicity@jscp1998.jp)